



高収益企業の特性『迅速決算』

日々の記帳と月次決算は経営の要諦
税理士法人TACT高井法博会計事務所
TACTグループ関連十二社代表
税理士 高井 法博

高収益企業には様々な特性がある。その中の一つに『迅速決算』がある。当社の経営計画書の一節に、左記のように銘記している。

「社会貢献度や優れた品質・技術力等をいくらアピールしても、財務内容が悪ければ今や全く評価されない時代であると銘記すべきである。そのために、業務の単純化・平準化・標準化・日常化・システム化を常に行い、翌月六日以内にグループ会社全ての『月次決算』『時間当たり採算表』ができる体制を確立し、問題点には直ぐに具体的な手を打つ。東証に上場している株式会社あみやき亭は、決算期日からたった二日後に決算発表をするという。これを可能にしているのが日次決算で、創業以来十三年間連続、増収増益を続けている。これをベンチマークとして『結果管理』や『同時管理』ではなく、『目標差額』をつかみその差額を埋める『先行管理』体制を確立する。」

かつては翌月の六日には月次決算ができたが、人の異動もあり、十日前後の作成となってしまう。この改善のために昨年経理のベテランを一名採用し、この実現を命じた。一年近く経つのに一向に改善の兆しも見えず、

逆

に数日遅れるような状況で、更にいくつかの改善等を指示したが、ほとんど手がつけられず進まない。本人に問いただすとできない理由がいろいろ出てくる。そのほとんどが『他責』である。元々、私自身が経理の専門家である。当人の日報や月間予定表をつぶさにチェックした結果、全く無駄な作業に終始していることを発見し彼をこの仕事から外した。

その結果、月次決算の完成期日は半減し、翌月の四日前後と計画以上の期日にできることとなった。更に、各々の作業分析を行い仕事の組み替えなどの改善も行った結果、経理部門の作業時間は大幅に減少した。

また、あみやき亭の佐藤啓介社長に是非一度お逢いしたいと常々思っていた。かねてから親しい経営コンサルタントの方が佐藤社長と懇意で、その方から偶然にも私の著書を贈呈していた。早速、そのコンサルタントの方経由で、佐藤社長から逢っても良いと言っていた。携帯電話の番号まで教えていただいた。

正直一面識もないのに、携帯電話に直接電話をする非礼に戸惑ったが、勇

気を奮って電話をしたのが四月二日で、ちょうど期末二日後にして東証で決算発表をしておられる真最中であった。何か運命的なものを感じた。その後三回ほどお逢いし、お話を聞きましてその行動を拝見させていただく中で、成功の極意をいくつも発見することができた。その中の最たるものが『迅速決算』である。その成功要因の詳細は、この一期一会七十八号の佐藤社長とのインタビュー記事をご参照いただきたい。当日の決算が翌日の昼にはできるといふ『日時決算』体制を確立しておられる。

月次決算体制の確立が高収益を生む

当社の定款の第一条に、法人の位置付けとして次のように定めた。

「当法人は、お客様の経営体質強化と健全経営の実現のために、お客様に対し『ビジネスサポート業』『情報発信基地』『社外重役』としての役割を果たし、お客様の事業の発展に寄与し、当法人の発展と全社員の物心両面の幸せを勝ち取り、もって国家・社会の発展に貢献することをTACTグループの共通の使命とする。」

この経営理念・方針のもとにいくつもの事業施策を推進しているが、そのうちの最も根幹を成すものが、『巡回監査を通じた正確な月次決算書をお客様に早期に提供すること』にある。ちなみに当事務所の巡回監査率は九十二%前後でほとんどのお客様に対し、翌月には前月の月次決算が提供できる体制を確立している。

昭和五十八年には日本の個人事業をも含めた事業所数は五百三十三万社あったという。それが平成十八年末では四百二十万社となり、百十三万社が減少している。なんと五社に一社が減ったことになる。現実はこの数年毎年六%近くの廃業・倒産と四%近くの創業があり、廃業だけを見れば現在の企業は十年で六割以上が減っているということになる。また国税庁の発表によると、現在の黒字企業割合は三十%(赤字企業割合は七十%)という中で、当社のお客様の昨年一年間の黒字企業割合は六十二%(赤字企業割合は三十八%)であった。この数字は、お客様のご努力が第一であることは論を待たないが、当社創業の理念を愚直に実践してきたことも誤りではなかった事を物語っていると思っている。

ちなみに昨年M&Aをさせていた会計事務所黒字割合は、やはり全国平均と同じ三十%前後であった。高収益企業を作るポイントは正しい理念方針の確立をはじめいくつもあるが、経営者自身が数字に強くなること、その第一歩がしっかりと記帳を行い、迅速な月次決算書を出し、その数字が訴えかけてくる声に耳を傾け、迅速に具体的方策を考え判断・決定し、実行に移し、翌月の月次決算でその判断の正しさを検証していくことである。こう考えると本来良い会社とか悪い会社があるのではなく、良い社長と悪い社長があるだけなのだという事をつくづく思う。